

## 博物館と実験室

近代工業技術を習得する上で、実物を知ることは欠かすことのできない学習方法です。

工部大学校都検ヘンリー・ダイアー（Henry Dyer）は博物館で実見することを講義以上に重要だと評しており、また工部大学校での教育を語る上で、必ず指摘されることの1つに、実地教育の重視が挙げられます。学内での実験はもちろんのこと、学外の作業場に赴き、長期間の実習を行っていました。しかし、これらは工部大学校のみに限られた状況ではなく、工学部のもう一つの前身校である東京大学理学部（工芸学部）においても同様でした。

### 工部大学校と東京大学理学部

明治6年の工学寮工学校開校直後は校舎の一室を当てていましたが、明治10年の小学校廃校後、この小学校校舎が博物館となります。博物館には、図面からは得ることができない知識を得るため、主にイギリスから輸入された参考品が学科ごとにそれぞれ展示されるほか、寮内での制作品が同様に展示されていました。収蔵品の区分をみると、工部大学校七学科のほか、「日本百工製産部」「美術部」「雑部」「卒業試験図」という4種類の区分があることが解ります。

工部大学校博物館収蔵品数（『東京大学年報』より作成）

	明治18年度		明治18年度
土木工学	590	日本百工製産部	3730
機械工学	1106	美術部	1341
造船学	29	雑部	737
電気工学	278	卒業試験図	210
造家学	77		
応用化学	1101		
採鉱及冶金学	8903		

この収蔵品のうち、「日本百工製産部」が『工部大学校博物処 日本産物及器械類目録』に該当すると考えられます。この「日本百工製産部」には「日本木匠器具ニ比較スル為メ」に、西洋の大工道具が含まれていました。

一方の東京大学理学部博物館にも、理学部各学科の参考標本が陳列していました。

### 帝国大学工科大学

明治19年の帝国大学令を受け、東京大学工芸学部（理学部から分離）と工部大学校が合併し、帝国大学工科大学が設立されます。しかし本郷の地に工科大学の校舎はいまだ完成しておらず、明治21年7月の仮竣工までは、虎ノ門の旧工部大学校校舎を使用していました。7月の仮竣工を受け本郷の工科大学本館への移転が行われますが、その際に「従来ノ博物館ヲ廃シ、諸種ノ標本模型並ニ器械ハ皆、之ヲ各教室に配置シ、主任教授ヲシテ之ヲ保管セシムル事トナセリ」と従来の博物館が廃止され、各教室（学科）での管理となります。この時に、「日本百工製産部」は各学科に配分され、そのなかの大工道具は造家学科（後の建築学科）の管理となりました。

工科大学が本郷の地に移ったことで、工科大学校舎の建設が進み、各学科の教室のほか試験室、実験室などが整備されてゆきます。1900年パリ万博に出展した『東京帝国大学』写真帖をみると、数多くの実験室が写されています。これこそ、ダイアーの求めた「実地教育」の姿なのでしょう。